

甲斐市立竜王北小学校 自己評価書

令和5年2月8日（水）

校長 古屋 正樹

記述者 教頭 小山田拓也

学校教育目標 「創造性豊かな心身ともにたくましい子どもの育成」

- ① 自ら学び深く考える子ども
- ② 心美しい思いやりのある子ども
- ③ 明るく健康でたくましい子ども

学校経営方針

- ・全ての教職員の力を集結する中で、職員組織の協力・支援体制を確立し、活力ある学校の創造と教育目標の具現化に努める。
- ・教育目標の達成を目指した創意ある教育課程の編成・実施・評価に努める。
- ・確かな学力の向上を図るための学習指導の改善と工夫に努める。
- ・教職員と児童、児童相互のふれあいを深め、豊かな心を育むとともに、きめ細かな生徒指導に努める。
- ・教師として、常に研究と研修に努め、校内研究の充実を図るとともに、専門職としての資質能力の向上に努める。
- ・地域人材を活用した道德教育の推進に努める。
- ・児童自らが進んで健康な生活を送ることができる実践的態度の育成に努める。
- ・教職員間の支援体制の確立、家庭や関係機関との連携を通して、特別支援教育の充実に努める。
- ・安全な学校生活が送れるよう危機管理体制を確立する中で、教職員の危機管理意識の高揚に努める。
- ・保幼・小・中や家庭・地域・関係機関との連携を図るとともに、こまめな情報発信を通して、地域に開かれた学校づくりに努める。
- ・外国語（英語）活動において、ALTと連携を図る中で国際理解教育の推進に努める。
- ・教育環境の整備・充実を図り、教育活動における効果的な活用と環境教育の推進に努める。
- ・横断的教育活動を通して、ボランティア活動等福祉教育の推進に努める。
- ・小・中学校9年間を見通した効果的な指導を図るため、小中連携を図る。

1 全体評価

○「教職員自己評価」「保護者アンケート」「児童アンケート」の3つのアンケートを行い、結果はA評価（とてもそう思う）、B評価（そう思う）を合わせて「肯定的評価」としたうえで、結果の考察を行った。

- ・全般的に教職員・保護者・児童のアンケート結果は、どの項目も肯定的な結果であった。このことから、学校教育を全体的な視点でみた時、本校の教育が充実した中で行われていると言える。
- ・学校教育目標の具現化に向け、学校経営方針に基づいた全職員の共通理解のもとで、統一感のある指導が図られてきた。
- ・質の高い教育を目指し、日々の教育実践がなされ、確かな学力を育てることに一定の成果を見出していることがうかがえる。
- ・個々の教職員が問題意識を持つとともに、全体で課題を共有して取り組むことにより、いじめや不登校等について、児童一人一人を大切にしたいきめ細かな指導を展開することができた。
- ・コロナ禍により中止、縮小された学校行事も依然として多い中、運動会をはじめとした学校行事の取組を通して、学級・学年集団づくりを推進し、集団生活を営む力を育てることができた。

・学校が多くの子どもたちにとって楽しい居場所となっており、学校生活の中にそれぞれの力を発揮でき活躍できる場が確保されていると言える。 ・地域との連携についてはコロナ禍の影響が依然として残り、十分ではない状況がある。 ・教職員の多忙化が言われる中、働き方にゆとりをもたらすためにも、教職員の意識改革をすすめるとともに、業務の効率化やICTの効果的な活用などにさらに取り組む必要がある。	
2 項目ごとの評価結果（達成状況・改善策）	
I 学校教育目標に関して・学校経営について（教職員自己評価から）	
達成状況	・1「あなたは学校経営方針や学校教育目標に基づいた教育活動を行っている」、2「あなたの学校は、学年の教育活動計画が、教育目標や重点目標を踏まえたものになっている」、3「あなたは、学校の教育活動計画に基づき実態に即した教育実践を行っている」の肯定的なAB評価がほぼ100%であったことから、学校教育目標、学校経営方針、本年度の指導重点が教職員に浸透し、それに基づいた教育実践が学校全体としてなされていると言える。 ・一方、4「あなたの学校はPDCAサイクルで教育活動が取り組まれている。」のA評価が60%を下回っていることから、「計画・実行・評価・改善」の考え方を再度確認し、改善していく必要がある。 ・また、5「あなたの学校は特別支援教育の体制を整え、全職員の共通理解が図られている」のA評価が48%となっており、特別支援教育を学校教育の優先課題とする統一した意識や連携体制の充実が十分でないとする職員が少なくないと言える。
改善策	・今後もさらに、学校教育目標達成のため、一人ひとりが学校教育目標・学校経営方針・指導重点の認識や理解を深め、日々の教育活動との関わりを意識していきたい。 ・PDCAサイクルを生かした教育活動を学校全体で取り組んでいき、学校教育目標の具現化につながる充実した教育活動の改善を今後とも図っていく。 ・校内で特別支援教育について、校内支援委員会を核として研修の機会を設け、特別支援教育に対する全教職員の意識統一と連携の充実を推進していく。
II 学校運営について	
達成状況	・1「危機管理マニュアルを理解している」のAB評価はほぼ100%ながら、A評価のみを見ると約48%となっている。この数値は年々向上してきていたが、今年度ポイントを下げた。若手職員の増加にともない、危機管理に関する共通理解や危機対応実践力の向上についてさらに取り組む必要があると言える。 ・2「個人情報保護・情報セキュリティの観点から、諸表簿や文書、記憶媒体を適切に管理・活用している」、3「他の教職員と連携して協働体制で教育活動にあたっている」、4「職務上「報告・連絡・相談・確認」を行っている」についてはAB評価がほぼ100%であったことから、適切な情報管理の下で、報告・連絡・相談等の情報共有がなされ、共通理解をもって協働的な教育活動が展開されていると言える。 ・5「校内研究（研修）に主体的に関わっている」のAB評価がほぼ100%であるが、A評価のみを見ると30%を下回っている。昨年度までの研究指定校としての研究を終え、新たな研究テーマを掲げた今年度、試行錯誤しながら研究を進めてきたことがうかがえる。 ・6「校務支援システムを十分活用できている」のAB評価が約90%と昨年度と同等であり、システムへの習熟が進んでいることがうかがえる。 ・7「業務の効率化等の働き方改革を意識して職務にあたっている」のAB評価は約94%であり、意識の上では改革が進んでいることがうかがえる。

改善策	・危機管理マニュアルの理解については昨年度より下降している。職員の入替えや若手職員の増加を踏まえ、より分かりやすいマニュアルへの見直しや周知徹底を図っていく。 ・校内研究に関しては、今年度の成果と課題を明確にし、全職員が積極的に研究に参加するために、引き続き本校の実態を踏まえた研究テーマや研究組織体制を設定していく。
Ⅲ 学習指導について （職員自己評価、児童及び保護者アンケート結果も含めて）	
達成状況	・ＡＢ評価合わせると７項目中５項目で１００％となっており、質の高い教育を目指し、日々の教育実践がなされ、確かな学力を育てることに一定の成果を見出していることがうかがえる。 ・Ａ評価のみを見ると「学びの意欲を喚起する授業を行っている」「協働的な学びを取り入れた授業を行っている」「ユニバーサルデザインの視点を意識した授業を行っている」のポイントが昨年度より上昇している。 ・「ICTを効果的に活用した授業を行っている」のＣ評価が約２０％であり、GIGAスクール構想によるICT環境整備に対応した授業について試行錯誤が続いていることがうかがえる。 ・全校児童の「先生はよく勉強を教えてくれる」「国語・算数の内容はわかりますか」については、ＡＢ評価は高く、保護者も「学校は熱心に授業に取り組んでいる」について肯定率が９０％に達している。しかし、「学校の授業は楽しくない」が３％、「授業がわからない」と感じている児童が２％程度いることや、学校の授業への熱心さに対する保護者からのＡ評価が２０％にとどまる状況から、引き続き「わかる授業、楽しい授業」づくりに向け、教師の授業力向上やきめ細かな指導体制の充実を図っていく必要がある。 ・家庭学習については、児童・保護者・教職員いずれもＡＢ評価が９０％を超えている。共通認識をもって家庭学習に取り組み、定着している状況がうかがえる。 ・一日の読書時間については、児童が「１時間以内」が最多であり、昨年度より上昇している。
改善策	・校内、校外の研修機会を各教職員が積極的に活用し、授業改善の工夫に引き続き取り組み、「わかる・楽しい授業」を実践する。 ・モジュールの時間を有効活用した反復指導、個々の児童に合わせた課題提示、支援員・支援スタッフによる個別的指導、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり等により基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る。 ・ICT機器を積極的に利用し、「主体的・対話的で深い学び」の具現化を目指す。 ・「やまなしスタンダード」に基づいた、家庭学習とのつながりを意識した授業を行う。 ・読書に親しむ時間を確保するとともに、読書の楽しさに触れる活動を充実させ、自ら読書に親しむ習慣を身につけさせる。
Ⅳ 生徒指導について （職員自己評価、児童及び保護者アンケート結果も含めて）	
達成状況	・生徒指導について教職員のＡＢ評価は、６項目中４項目が１００％、２項目が９０％以上であった。全体的には昨年と同じ傾向であったが、全体的にＡ評価が昨年より上昇している。児童一人一人を見つめて丁寧に対応し、校内研と連動しながら学級集団づくりに取り組んできたことを評価していると考えられる。 ・「問題行動の早期発見・早期対応ができています」についてはＡ評価が５０％となっている。これは自身の対応が十分であると慢心せず、常に危機感をもっていることの表れと考えられる。 ・キャリア教育は、教職員のＡ評価が昨年より約４ポイント下降している。「キャリアパスポート」の有効活用について、多くの教員がいまだ手探りの状況であることが考えられる。 ・児童アンケートの「学校が楽しい」「仲の良い友だちがいる」「困ったことがあったら相談できる先生がいる」については、多くの児童は肯定的である。しかし、昨年度と比較すると若干Ａ評価が若干下降しており、児童理解をきめ細かく行っていく必要がある。 ・保護者アンケートでの「学校は楽しい」「相談できる友だちがいる」「相談できる先生がい

	る」についても昨年度より若干下降している。 ・朝食については、ほとんどの児童が食べて登校しているが、食べてきていない児童も約3%いる。家庭との連絡を取る中で改善を図る必要がある。
改善策	・児童一人ひとりが主体的に参加し活躍できる「わかる授業づくり」や「居場所づくり、絆づくり」につながる行事等、自己肯定感を育む教育活動の充実を図っていく。 ・「問題行動の早期発見・対応」については、Q-U調査や児童対象の学校評価、いじめアンケートを有効に活用し、児童一人ひとりの理解や支援を行っていく。 ・担任だけでなく、全職員が全校児童とのコミュニケーションを深めて信頼関係を結ぶことで、児童の小さな変化をきめ細かく見取り、問題の早期発見を図る。また、保護者と連携を図りながら、児童・保護者が相談しやすい関係づくりを目指す。 ・生徒指導委員会等を活用し、児童についての情報交換と指導方針を共有し合うことで、全職員が同じ歩調で対応できるようにする。 ・朝食については、家庭との連絡を取る中で改善を図る必要がある。
V 地域との連携について （職員自己評価、児童及び保護者アンケート結果も含めて）	
達成状況	・地域との連携については、昨年度同様、全体的に低い数値となった。教職員の自己評価において「地域人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導」についてはA評価が25%にとどまり、コロナ禍により、地域人材や外部指導者を招いての学習機会をなかなか設けることができない状況が続いていることを示している。 ・ホームページや学級・学校だよりをはじめ、図書・保健・給食・研究だよりなど各担当からも保護者への情報発信を行い、開かれた学校づくりに努めてきた。しかし、保護者アンケートのA評価は依然として低い。今後も子ども達の活動の様子を伝える新しい情報の更新を随時行っていきたい。
改善策	・コロナの様々な制限が緩和されつつある中、地域教材や人材を教育資源として取り入れ、地域の教育力を生かす教育活動に取り組んでいく。 ・ホームページを学校活動紹介の発信源の一つとして保護者・地域に周知し、内容の充実や広報活動に努めていく。また、保護者・地域のニーズに合致した情報を提供できるよう、読み手の目線での発信を意識していく。
VI 学校の特徴に関して	
達成状況	・教職員の自己評価では、4項目すべてにおいてAB評価が約90%に達しており、「ユニバーサルデザイン」「ノーチャイム制」「『広場の時間』の活用」「モジュール学習」という本校の特色は、一定の成果があったと捉えていることがうかがえる。 ・しかしこれらについての教職員のA評価は昨年度より大きく下降した。昨年度、小中学校体育連盟の研究指定を受け、様々な体育活動が展開されたことを評価してのものであったことが考えられる。
改善策	・ノーチャイム制は、それを実施する意味を再度職員が確認し、子ども達に伝えて自律した生活を意識させることが重要であり、自ら考え主体的に行動できるように継続的な指導を重ねていくことが必要である。 ・「広場の時間」は、「体育広場」「音楽広場」「児童会広場」として今後も様々なアイデアで趣向を凝らし、子どもたちが主体的に取り組む態度の育成を図っていく。 ・「ユニバーサルデザイン」の視点を生かした環境整備についても、その趣旨や効果を教職員が共通理解をもちながら取り組む必要がある。 ・学校の特徴ある教育活動は、本校の実態とニーズを踏まえた必然性のあるものであることから、年度が変わり教職員が入れ替わっても、長く継続していくものであることを共通認識としてもちたい。

Ⅶ 創甲斐教育に関して	
達成状況	・教職員の自己評価では「児童の読解力や表現力を高める指導を行っている」「道徳教育を通じて思いやりや正義感、命を大切にする指導を行っている」「児童の体力や健康の維持増進を意識した指導を行っている」の3項目すべてについてA B評価がほぼ100%となっている。
改善策	・創甲斐教育の掲げる「国語力」「自己表現力」「体力」の向上については、学校教育目標や学校経営方針に掲げる「知育・徳育・体育」が目指すところと重なり、それらは学習指導要領の適切な実施によって実現されるものである。学校長のリーダーシップの下で、学校教育目標の実現に向けて教職員が一丸となって教育活動に邁進することで、創甲斐教育が目指す理念の実現にも近づくものとする。
3 まとめ	
	〈成 果〉 ・「学校教育目標・学校経営方針」の全職員の共通理解のもとで、適切な学校運営がなされている。 ・職員間の情報共有を基盤とした統一した指導が図られている。 ・学習指導や生活指導及び生徒指導等において、個に応じた指導の充実が図られている。 ・ユニバーサルデザインの視点を生かした環境・授業づくり、ノーチャイム制、広場の時間など児童の実態に合った特色ある取組が行われている。 ・保護者との連絡調整・関係機関との連携は着実な成果を上げている。 〈課 題〉 ・肯定的な回答率が伸びている内容については更なる向上を目指すとともに、肯定的な回答率が低下した項目や、A評価（とてもそう思う）のみで見た場合に数値が低いものや下降しているものについては、実態を精査し改善を図っていく。 ・危機管理マニュアルに基づいた安心・安全な学校づくりを推進する。 ・一人一人が活躍し、自己肯定感の高まる授業づくりをさらに推進する。 ・ICT機器の積極的な利用と、主体的・対話的で深い学びを目指した教育実践を進める。 ・教職員と児童の信頼関係を強め、いじめや不登校の未然防止や早期対応を図る。 ・教職員が子どもたちと向き合う時間と心のゆとりを確保するための業務改善、働き方改革を推進する。 ・コロナ後を見据えた教育活動の充実と、地域等外部との連携の充実を図る。